The Japan Society for the Study of Education

子ども人口減少期における教員養成及び教育学部問題
＜教師のライフコースとその成長＞

司　会　高野　和子（明治大学）
　　船寄　俊雄（神戸大学）
報告者　山崎　準二（静岡大学）
　　田子　　健（名城大学）
　　溝上　　泰（鳴門教育大学）

教師のライフコースと成長
――垂直的な成長モデルからオルターナティブな成長モデルへ――

山崎　準二（静岡大学）

1．はじめに――「ライフコース」と「成長」とは

「人生の軌跡」とも訳されるべき「ライフコース」は，未だ多義的な概念であるが，それを「時間」という視点で見るならば，その中には「個人時間（加齢・成熟）」と「社会時間（家族や職業などの周期）」と「歴史時間（時代）」という3つの時間が束ねられている．「教師のライフコースと成長」も，こうした3つの「時間」の束の中で遂行されており，その3つの時間が互いに交じり合い，共時性（synchronization）を有する結節点において教師としての変化の節目＝「転機（turning point）ないしは移行（transition）」が生み出されるのである．したがって「教師のライフコースと成長（development）」を捉えるには，教職に就く以前の段階も含めた生涯にわたって，かつ個人のライフコース上における全ての時間の共時化の様相を視野に入れることが前提的に不可欠である．

また「成長」という用語もまた曖昧な概念である．「生涯にわたる過程」としての「発達」には「連続と非連続」「向上と低下」「獲得と喪失」という2つの相反するものが織り成しあって存在すること，そしてそれは「個人の生活条件や経験」「歴史的文化的な条件」「発達的要因」などに規定されながら，一人ひとり極めて多様な展開を示していくいわれる[1]．「成長」概念にはこのような視野も同時に不可欠である．

2．「水平的（horizontal），ないしはオルターナティブなプロフェッショナル・キャリア・パターン」[2]としての「教師のライフコースと成長」

わが国において，教師の職業的社会化研究，とりわけその予期的社会化研究は，1970年代から80年代初頭に興隆した．それは小・中学校教師の需要増大期とそれに伴う教育学部の規模拡大期を背景として，教師の養成ないし準備教育の在り方の模索とそのための実態把握の必要性に支えられていた．またそれに続いて職能発達研究が1980年代に興隆した．それは政府・文部省による数々の現職研修施策と各都道府県における生涯研修体系化への動向を時代的背景としている．具体的な力量内容の発達パターンを確定し，将来的な見通しを立て，最終的には生涯研修体系づくりを効果的で意義あるものにしていこうという問題意識に支えられていた．

そして，職業的社会化研究においては一定の「役割系列モデル」が，職能発達研究では「発達段階モデル」が，それぞれ志向されてきた．それらは，役割取得の失敗や放棄，発達の未実現や下降など内に含みながらも，概ね系列に従って，段階に即して進んでいくことが順調で成功だと考えられていた．いわば望ましい目標としての「垂直的（vertical）な成長モデル」が暗黙のうちに前提とされていたのではないか．

しかし，そのような一定の役割や力量を個人の中に積み上げ，右肩上りの一定の成長パターンを描く「垂直的な成長モデル」では，もはや教師のライフコースと成長は捉えきれないし，成長主体の固有性を無視する点で有害ですらある．一つだけ事例を掲げる．

1960年生まれのK教師（小学校教師，男性）は，共通一次試験による最初の入学生である（1979年4月）が，中学校時代にテレビドラマの「金八先生」や「熱中時代」を見て教職に接近してきた世代である．卒業時（1983年3月），いわゆる中学校を中心に学校の“荒れ”が激しくなっていたため，小学校教師を選択する．新任期はちょうど所属校での授業研修を中心に新採研修が強化されていた．毎週末の週案提出，校長や教頭による授業参観と「介入授業」もどきの途中交代指導は，「やっぱりK先生，まだ一人前じゃないんだ」という子どもの声を生み，辛かった．K教師のライフコースにみられる「歴史時間」の諸姿である．

新任期の実践は，K教師が自ら言うように，さながら「自分が教師になったらやってみよう」と思いながら見ていたテレビドラマの一シーンの再現のようであった．そんな時，先輩教師から「おまえのクラスは授業以前の問題だなあ」と言われた．しかし，そのことの意味が自分なりにもわかり始めるのは附属校へ転任した後のことであった．

新任期における子どもたちとの「学級王国」的実践を積み重ねていくうちに，次第に「本質的な勉強をしなければ」との思いが強くなっていく．思いがけない附属校への転任がそれを可能にした．「自分がしたいと思っていることの理論的裏付けが欲しい」と思い，本をメチャクチャ読むようになった．K教師における第一の転機が生れた．

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for the Study of Education

附属校転任3年目あたりから，K教師は「見ごたえのあるような授業づくり」にこだわりすぎている自分を感じ始める．それはある道徳の授業を直接的なきっかけとしている．参観していた教師たちからは厳しい批判も受けたが，K教師自身にとってはなによりも子どもたちと自分が，そして子どもたち同士が相互に理解しあえたような手ごたえを感じた．K教師の中に，「いい授業というのは，子どものいい姿に出会えたこと」「自分と自分のクラスの子どもたちは充実した時間がもてたという，唯それだけでいいのではないか」という思いが芽生えてきた．K教師の第二の転機が生れたのである．

以上の事例には，新任期のがむしゃらに子どもたちの中に入っていこうとした教師から，見ごたえのある授業の創出にとらわれていた教師を経て，子どもたちとの充実した時間こそを生み出そうとする教師へという，K教師の「水平的ないしはオルターナティブなプロフェッショナル・キャリア・パターン」のプロセス，すなわち「オルターナティブな成長モデル」が見られるのである[3]．

3．「教師教育実践」としての「ライフコース研究」の可能性

教師としての成長モデルを上述のように捉えるならば，それに対応して教師教育のあり方もまた転換されねばならない．従来の「垂直的な成長モデル」に立脚するならば，望ましい成長モデルが先ず描かれ，その成長を促すための教育が与えられ，その成長水準に到達したかどうかが測られる．そしてそれらを描き，与え，測る主体は，成長する教師自身ではない．それに対して「水平的ないしはオルターナティブな成長モデル」に立脚するならば，変容していく方向を見定め，その変容のための学習を要求し，その変容を果たしたかどうか手ごたえを感じるのは，成長する主体の教師自身となる．

「教師の職能成長（professional growth）は，高速道路を車で走るというよりは，熱帯雨林の中で道を見つけて行くようなものに近い．職能達成（professional fulfillment）へと通ずる個人の進路は，自分たちがそれぞれ発見していかねばならないのである．」ともいわれる．そうであるならば，「自分たちがそれぞれ発見して」いく力の育成こそが求められることになる．「未来の教師を養成する過程において，教師教育者は応急処置のリストが簡単に提供されることのないようにしなければならないのであって，むしろ〔教師として直面する実際の〕ディレンマについて教育実習生の自律的な思考を促すことが必要なのである．」[4]

したがって，「獲得されるオルターナティブな成長」を支援する有効な教師教育実践の一つとして「ライフコース研究」の作業過程そのものがあると考える．「ライフコース研究」では「語り手：成長の主体者」が内に抱えるさまざまな思いを引き出し，聞き取りながら，その「語られたもの」一つ一つを個人的社会的歴史的な文脈上に位置づけ，意味付与し，解釈することがリサーチャーである「聞き手：成長の支援者」に求められている．養成教育や現職教育も含めて，従来の教師教育実践が学生・現職教師の外側から理論・技術を提供することによって成長の引き上げを図ろうとしがちであったのに対して，「ライフコース研究」では，「語り手」自身が，研究のための単なるインフォーマントに止まらず，それらの文脈上にいる自分に気づき，発見し，時には癒され，さらには次なる自分の成長方向を見出し，選択していくことが出来るからなのである[5]．

大学院教育を，従来の「垂直的な成長モデル」に基づいた「積み上げ型」による生涯研修体系・講習の一環として位置づけるのではなく，一人ひとりの教師の「オルターナティブな成長」を支援していくことができるようなものへと転換する必要がある．

注

1）P. B. Baltes, "Theoretical Propositions of Life-span Development Psychology : On the Dynamics Between Growth and Decline," *Developmental Psychology*, (1987, Vol. 23, No. 5, pp. 611-626.) 東洋ほか編集・監訳『生涯発達の心理学 1巻 認知・知能・知恵』新曜社，1993に鈴木忠訳所収．

2）D. Thomas, ed., *Teachers' Stories* (Open University Press, 1995) pp.14-15.

3）筆者の教師のライフコース研究の一環として行なった，国立大学教育学部の9つの卒業コーホートを対象としたインタビュー調査より．

4）M. R. Jalongo, J. P. Isenberg, with G. Gerbracht, *Teachers' Stories : From Personal Narrative to Professional Insight* (Jossey-Bass Publishers, San Francisco, 1995) p.143., p.162.

5）C. Day , J.Calderhead, & P.Denicolo, ed., *Research on Teacher Thinking : Understanding Professional Development* (The Falmer Press, 1993) p.175. p.215.

NII-Electronic Library Service